ほけんだより

病児・病後児保育「みどり」
令和７年１１月発行

今月のテーマは「**溶連菌感染症について**」です！

溶連菌感染症は正しくは「A群溶血性溶連レンサ球菌咽頭炎」といい、
溶血性連鎖球菌という細菌が原因の病気です
この菌が主にのどに感染し、腫れや痛みを引き起こします。
溶連菌感染症の感染は子どもに多く、４歳～９歳ごろに多くみられる病気です。
３歳以下の乳幼児や成人も感染することはありますが、症状が見られない
「健康保菌者」である場合があり、健康保菌者からの感染は、
まれと考えられています。

溶連菌の症状

症状の代表的なものは、発熱（３８～３９℃）と、のどの痛みです。しかし、３歳未満ではあまり熱が上がらないと言われています。そして、体や手に小さくて紅い発疹が出たり、舌にイチゴのようなつぶつぶができたりします（イチゴ舌）。風邪と違って咳や鼻水があまり出ないというのもこの病気の特徴です。この病気には潜伏期間があり、実際に感染してから、だいたい２～５日で症状が出ます。

薬は溶連菌を退治するまで飲む

お薬を飲み始めると、２～３日で熱が下がり、のどの痛みもやわらいでいきます。発疹が出た場合、急性期を過ぎて、手足の指先から始まる皮むけが認められるようになります。確実に溶連菌を退治し、重大な合併症を引き起こさないために、症状が消えても抗菌薬はしばらく飲み続けなければいけません。一部の抗菌薬以外は、５～１０日飲み続ける必要があると言われていますので、医師処方どおり最後まで飲ませることが大切です。決められた期間はしっかり抗菌薬を飲みましょう。

溶連菌感染症は、繰り返しかかることもあります。
おとなになってもかかります。感染（飛沫感染）することがありますので
手洗いうがいなどをし、家庭内感染も気をつけましょう。